

# 大川周明における改革思想の形成と本質

刈 田 徹

本稿は、大川周明の国家改造思想の形成と本質を中心に考察することを目的にしている。彼は、1931(昭和6)年に、3月・10月両事件に参画し、この間に起された「満洲事変には民間唯一人の中心的指導者となった<sup>1)</sup>」のであるから、我が国の政治・外交史上で及ぼした影響は大きく、その思想的特質を解明することは意義あることと考えられよう。

本稿では、以下、大川が何故、国家改造とアジア復興、更に満蒙問題の根本的解決を志したのか、彼の改造思想や日本精神、国家観や軍部観は如何なるものであったのか、などを主要課題に考察しようとするものである。それはまた、いわゆるアジア主義と超国家主義の実証的な思想史研究にも通ずるものがあるであろう<sup>2)</sup>。

## 五高時代

大川は、1886(明治19)年12月に山形県飽海郡西荒瀬村に先祖代々医を業とする家の長男として生れた。長じて、彼は、漢学者・角田俊次の家塾に寄宿して県立庄内中学校へ通学し、漢学の素養も身につけたが、フランス語学習のため鶴岡天主公会堂へも通い始め、自然に聖書をひもとく間に宗教的に目覚るに至

---

1) 大川周明『大川周明全集第1巻』昭和36年、岩崎書店、7頁、狩野敏「大川周明略伝」。なお、本全集は大川周明刊行会発行として昭和49年まで全7巻が刊行されており、以後、本稿では第1巻を「全(1)」の如く略称で記すことにする。

2) 本稿は、筆者の主たる関心により、その考察対象とする時代を満洲事変頃までに限った。従って、史料として使用する大川の著作なども、大部分、その頃までのものである。

った。こうして、宗教哲学に関心を抱いた彼は、1904(明治37)年、医業踏襲という父親の期待を空しくしつつ、熊本第五高等学校へ進学したのである<sup>3)</sup>。

大川の十代当時の文章として、「羅馬の名将レギュラス」と題し次の如き書き出しで始まるものが残っているが、これは彼の思想を理解するための参考になるであろう。「以太利、カーセージ両国戦を開くや当時カーセージは国富み兵強く始は以軍大に破る。羅馬の将レギュラスは遂にカ国の為に捕はれ、獄中に投ぜられたり。然るに後に至り以軍大いに勢を得、大にカーセージを破り戦ふこと23年に及べり。<sup>4)</sup>」該文章の以後の要旨は、次の如くである。この戦争で財政的困難に陥ったカルタゴ国王は、レギュラスに対し、講和を実現させるならば帰国させよう、ともちかけたが、レギュラスは戦争継続による母国の勝利を確信し、これを拒絶した。けれども、国王は、和平交渉団と共にレギュラスをローマへ派遣し、ローマ側も財政的困窮により和平案を受け容れようとした。その際、レギュラスが、今こそ勝利を得る好機、と強く訴えたから、交渉は決裂した。彼は、誓を破り不徳の国となることを恐れて人々の止めるのもきかずにカルタゴへもどり、惨殺されたが、これを知ったローマ人達は勇気百倍して、カルタゴを一挙に滅亡させたという。

我々は、この文章が、祖国のために己れの命を犠牲にしうる勇気及び信義の尊ぶべきことなどを、強調しているように思われるのであるが、金内良輔(老壮会、猶存社、行地社各同人)は「大川周明の本質は、勇気の人の一語につき」と没後に回想している。なお、大川は、石原莞爾同様に、中学時代から同窓・高山樗牛の著作を通じニーチェ哲学の影響を最も強くうけた、と見る説もある<sup>5)</sup>。

ところで、大川は、五高当時に、幕末の開国論者・横井小楠に傾倒し私淑した。彼は、小楠の日本精神を高く評価し、やがてその思想にプラトンの国家論に類似する内容を認めるようになるが<sup>6)</sup>、当時を、1927(昭和2)年に次の如く

3) 全(1) 3～4頁「大川周明略伝」。

4) 富樫富『大川周明——回帰への遍歴』昭和57年、大東塾出版部、125頁。

5) 参照、同前書、127頁。引用文は、金内良輔「革命児・大川周明」『文藝春秋』昭和42年2月号、206頁。ニーチェ哲学との関連については、杉本健『海軍の昭和史』1982年、文藝春秋、58頁。

回想している。

一顧して長望すれば既に18年の昔となった。笈を熊本に負ふて五高の一学生たりし頃、或は吾れ一人、或は友と打連れ、沼山津の閑村を訪ふて小楠の傍を偃びたりしこと、幾度びなりしかを知らぬ。或時は寮禁を破って、深夜窃に窓より寄宿舎を脱け、沼山津に至りて小楠墓前に黎明まで座したることもある。満地の霜を踏んで帰りしことを想へば、晩秋が初冬の頃であつたらう。青春多感の年ごろのことなれば、熊本の人々が彼等の間より出でたる最も偉大なる一人に対し、其の墳墓を草莽に委し、其の塾舎に蚕を飼はしむるを見て、聖書に「予言者その家郷にては敬重まるものに非ず」とある言葉など思ひ合せ、窃に涙を催したこともあつた<sup>7)</sup>。

なお、この点に関し、五高時代の一同窓生も、当時、大川が小楠にどうしても急に会いたくなり、寄宿舎を無断脱出しその墓所で一晚中語り合つて、翌朝帰宿した旨を証言している<sup>8)</sup>。

五高時代の大川は、黄白万能の政治社会を批判し、社会主義による制度改革を主張し始めた。彼は、1906(明治39)年に、横井小楠著『沼山閑話』中の一節の趣旨を「一切の衆生は……等しくこれ天帝の摂理による宇宙究竟の目的の為に存在して、悠遙の過去劫より久遠の未来劫に亘る広大の天工に参与す可き光荣を有する一個尊厳なる天の子也と」解釈し<sup>9)</sup>、この点、あらゆる宗教、道德、哲学も「人をして其本来の真価値を自覚せしめ、以て其天分を尽さしめん<sup>10)</sup>」としているのに、現状は経済的に困窮する民衆に対し「物質輕蔑道德」、「心靈偏重道德」が説かれているにすぎないとし<sup>11)</sup>、更に次の如く述べる。

歴史の各時代に於て必ずや生産分配に関する特殊の方法あり。而して必然之よりして生ずる社会組織あり。当代の政治及び文明は此基礎の上に建設せられ、又此基礎によりてのみ説明せらる可きもの也と。これカール・マルクスによりて唱道せられたる一大真

6) 全(1) 118~21, 129~30頁「日本精神研究」(昭和2年)。

7) 全(1) 117頁、「日本精神研究」。

8) 大川先生10年祭実行委員会『大川周明遺芳』34~5頁、渡辺豊彦(述)「熊本五高時代の大川周明君」。

9) 橋川文三編『大川周明集』1975年、筑摩書房、3頁、「不浄の真金を如何す可き乎」。

10) 同前書、4頁、「不浄の真金を如何す可き乎」。

11) 同前。

理、ダルウキンが自然界に向ひてなせる発見を、人類社会に向つて為せりと称せらるゝ所のもの也。人文の歴史に於て斯くの如き大勢力を有する経済的羈絆を脱せん事、之を一般常人に向つて望むは、余りに重大に過ぎざらむや。果然事實は明かに之を証せり。社会の進歩発達は、之を支持し生活せしむる、富の分配生産の方法と常に其の歩調を一にせりき。故を以て若し希臘、英国、米国、支那、日本の歴史を、充分に解釈せんとする者は先づ各国の経済組織を知りて後にせざる可からざる也。……（中略）……然らば吾等の取らむとする手段は即ち如何。是を一言にして尽くす、曰く、現代の社会を其根柢より覆へして、更に健全なる経済的組織を形成するに在り。而して吾人は健全なる経済的組織を得んが為に、直ちに走りて社会主義に趨かざるべからず<sup>12)</sup>。

大川は、貧困に苦しむ多くの人々が精神的向上の志を持たぬことを知って悲しみ、その主要な原因が社会制度の欠陥にあるとして、この改革を主張したのであり、五高当時、「マルクスを仰いで吾師とした」という<sup>13)</sup>。

#### 大学時代

1907(明治40)年、五高を卒業した大川は「真実の宗教を求めるため」に東京帝大文科大学哲学科の宗教学科に進学し、印度哲学を専攻した<sup>14)</sup>。彼は、シュライエルマッハーら西欧の宗教学者達の諸著に決して満足しなかったけれども、これらの著作によって、宗教が誠の発露で、宗教的生活の深淺を測る物差しが誠の純・不純であり、最高の宗教が宇宙と人生に関する正しい解釈と人間生活の規範を与える、と考えるに至った<sup>15)</sup>。

彼は、五高当時より、プラトンの国家論を読みキリストもマルクスも及ばずと感激したり、エマーソンやバーム（ドイツの神秘主義者）、ダンテやダヴィンチ、スピノザやゲーテ、ヘーゲルやフィヒテらの著作に親しんで、「日本に思想なしと思った」ことさへあった<sup>16)</sup>。けれども、彼は、後に、横井小楠の場合

12) 同前書、7～8頁、「不浄の真金を如何す可き乎」。

13) 全(1)109～10頁、「日本精神研究」はしがき。

14) 全(1)4頁、「大川周明略伝」。全(1)777頁、「安楽の門」(昭和26年)。

15) 全(1)866頁、「安楽の門」。

16) 全(1)110～12頁、「日本精神研究」はしがき。

の如く。これらと同一の思想の流れを日本や東洋の思想に見出したのであり、西欧の思想に当初魂を動したのは「思想其者に非ず唯だ其表現の清新巧緻なる故である」という<sup>17)</sup>。そして、彼の研究対象が日本に回帰したのは、印度思想を研究して「薄伽梵歌」に親しんだからであった。

薄歌梵歌すなわちバガヴァット・ギーターは、紀元後一世紀頃に成立したインド史詩マハー・バーラタの一節である。西北印度のヴリシュニ族の長・クリシュナを崇拝対象とする、バーガヴァダ派の聖典であり、ガンジーを含む印度人の思想一般にも影響を及ぼした。その内容は、聖地クル・クシェートラでの親族間の決戦に疑惑を抱くアルジュナをクリシュナが激励することを骨子に、唯一神への献身的愛を強調し、既存の社会制度の上に立ち各自の本分を私心なく遂行すべきことを説いている<sup>18)</sup>。この薄伽梵歌が、大川に「仮令劣機にてもあれ、自己の本然を尽すは巧に他の本然に倣子に優る。自己の本然に死するは善い、他の本然に倣ふは恐るべくある」という教訓を与えたのである<sup>19)</sup>。彼は、当初、この原則を個人の上のみ解したが、後述の如く政治的現象に強い関心を抱くようになってから、国民の上にも同様に適用すべきであると切実に自覚するようになる<sup>20)</sup>。

彼は、1911(明治44)年、「竜樹菩薩論」を卒業論文に東京帝大を卒業した<sup>21)</sup>。當時を、その十年後に回想し、次の如く記している。「大学の哲学科を出た時、予が心密かに期したりしは、一生を印度哲学の色読に捧げることであった。僧侶によって知識を練り、瑜伽によって之を体達するの道を説くウパニシャドこそ、汲みて尽きざるわが魂の渴きを癒やす聖泉であった。かくて多くも要らぬ衣食の資を、参謀本部の独逸語の安翻訳に得つつ、日毎大学図書館に通って、心を印度哲学の研究に潜めた。」<sup>22)</sup>。

17) 同前書、111頁。

18) 『アジア歴史事典第7巻』1971年、平凡社、335頁。カルヴィン・カイトル著、岳真也訳『ガンジー』昭和58年、潮出版社、60頁。

19) 全(1)113頁、「日本精神研究」はしがき。

20) 同前。

21) 参照、橋川文三編「前掲書」、445頁「年譜」。

22) 全(2)4頁、「復興亜細亜の諸問題」の「序」(大正11年)。

彼は、大学当時、本郷区内の財団法人荘内館寄宿舎の住人であり、その舎監・佐藤雄能の了解下で参謀本部の翻訳稿料の入った際に館費をタバコやスキャキなどの勘定と共に一遍に支払っていたが、卒業後、同区内の朝陽館に移り、松村介石主宰の宗教雑誌「道」の編集料(月額20円)も生活を支えるようになる<sup>23)</sup>。

### 政治的覚醒

ところで、大川の印度観は、大学卒業後二年程経て大きく変わった。ヘンリー・コットン著“New India, or India in Transition”に遭遇したからである。彼は、この点、次の如く記している。「大正二年の夏であった。一夕の散歩に神田の古本屋で、不図店頭に曝さるゝ、コットンの書を見出だした。予はコットンの為人も知らず、また此書が世にも名高き著作なりとも知らず、唯だ書名の『新印度』とあるに心惹かれ、求め帰って之を読んだ。而して真に筆紙尽さざる感に打たれた。』<sup>24)</sup>。

著者コットンは、印度の行政事務に35年間携わった人で、彼の祖父をはじめ、父、息子も同じ職業に従事しており、出版当時、印度星上級勲爵士、並びに英国下院議員で Sir の尊称を有した。この書物は、1907年の改訂増補版によれば、1885年に初版、1886年に第二・第三版、及び普及版、1904年に新・改訂版(1905年に増刷)がロンドンで出されており、その目次は次の如くである<sup>25)</sup>。  
「1、印度の政治問題。2、印度の人々の意見と抱負。3、増大せる民族感情の激烈さ。4、印度の土地問題。5、印度の経済問題。6、行政改革(I、西欧人官吏を印度人官吏に代えること。II、行政機能から司法機能を分離するこ

23) 全(4) 249頁「佐藤雄能先生伝」の「解説」、全(1) 4頁「大川周明略伝」、橋川文三編「前掲書」445頁「年譜」、金内良輔「革命児・大川周明」前掲誌、212頁。なお、大川は佐藤雄能を「郷土荘内の生める偉人」として『佐藤雄能先生伝』を1944年に出している。

24) 全(2) 4頁「復興亜細亜の諸問題」。

25) 本稿で使用した原書名は次の如くである。Henry Cotton, “New India or India in Transition”, London, Kegan Paul, Trench, Trübner, & Co., LTD., 1907.

と及び行政事務の再組織。Ⅲ、地方自治政府と立法委員会)。7, 英国と印度。8, 政治的再建。9, 社会的, 道德的危機。10, 印度における宗教の将来。附録, ベンガル州の分離。索引。』<sup>26)</sup>。

次に、1906年11月に書かれた同書序文を掲げておくが、その本文は英国の読者を念頭におき叙述しているから、一般的な問題の討議に限定されている。

本書の目的は、印度で生じている政治的、社会的、および宗教的な大変化、及びこれらの諸変化との関連で我々の政策を神の啓示により導く筈の精神に対し注意を引き付けることである。

印度における政治的状況は、断固とした処置を要求している。我々の印度占領における諸状況は、行政上の困難の増大を示している。すなわち、英人官吏達が印度人の生活上の諸欠点を強く意識することによって情熱を喪失したこと、及び統治者と被統治者間の摩擦の増大である。この摩擦は、多くの原因によるけれども、特に支配民族の思考と言語におけるごう慢さに帰因し、印度の人々に教育が普及して独立と愛国心が成長することにより一層顕著になった。有能で精力的な印度人達は、我々自身によって啓発され教育され、新しい思想で心を広くし、英国の教育で生じた野心により燃え立ち、常に一層正当かつ禁じ難い要求をする。印度人の進歩の大海の波は、英国人の偏見の防波堤を打ちつけている。英国—印度共同体の成員は、…(略)…進み来る潮流を制止するよう政府に声高く呼びかける。政府は、この状況が要求しているものに十分に注意せず、…(略)…忠告に遠い耳を傾ける程強くも賢明でもない。

印度の政治問題は、印度国民の成長であり経済問題はその人民の貧困である。これらの問題の解決は、印度人民の正当な大意願と愛国的傾向を同情的かつ組織的に奨励することにかかっている。この変化の時代に、単に諸事件を導き調整するばかりでなく、要すれば干渉を差し控えるような建設的政策も必要である。困難なのは、混乱なしに古い秩序を改めることである。

印度人民の宗教的、社会的側面において生じつつある変化も、また同様に重要である。この場合の政府の機能は、賢明な管理政策によって、できるだけ現存秩序の基礎を保持することである。……(中略)……。……私は、我々英国の印度統治の貴重な特質を認識するのにやぶさかでないのと同様に、我々が与えた恩恵は、我々自身を公認の慣例以上に高め且つ単なる行政以上の機能を行使すべく準備しない限り、印度人民にとっ

---

26) 同前書, p. ix.

て決して現実のものにならないであろうと確信している。政府は、印度民族に新生活を熱心に導入してきたが、この政策に十分な効果を与えるように責任を全うすべきである。これらの責任が何であり、また将来採るべき我々の政策方針が何であるかは、読者に考慮して頂きたい主題である<sup>27)</sup>。

なお、同書本文では例えば、「英・印両民族間には、真の好意も、如何なる親交のしるしも、両民族を一つに混合することも決して見られず、常に嫌悪の感情が存在した」と述べ<sup>28)</sup>、また絶えず印度人は英国人によって暴行殴打され殺されもしたのに、公正な裁判がなされていない旨を述べている<sup>29)</sup>。この書から受けた影響に関し、大川は、1922(大正11)年当時、次の如く回想している。

コットンの著は、真摯飾らざる筆致を以て、偽はる可からざる事実に拠り、深刻鮮明に印度の現実を予の眼前に提示した。此時初めて予は英国治下の印度の悲惨を見、印度に於ける英国の不義を見た。予は現実の印度に開眼して、わが脳裡の印度と、余りに天地懸隔せるに驚き、悲しみ、而して憤った。予はコットンの書を読み終へたる後、図書館の書庫を涉って、印度に関する著書を貪り読んだ。読み行くうちに、単り印度のみならず、茫々たる亜細亜大陸、処として白人の蹂躪に委せざるなく、民として彼等の奴隸たらざるなきを了知した。

ウパニシャドはいつしか予の机上より影を隠した。豊太閤裂帛の怒りに魅入られたるが如き心を以て、予は専ら亜細亜諸国の近代史を読み、亜細亜問題に関する著書を読んで、亜細亜に対する欧羅巴侵略の経路、亜細亜を舞台とする列強角逐の勢ひを知らんとした。而して是くの如き研究は、更に予を駆りて近世欧羅巴植民史及び植民政策の研究に没頭せしめ……(中略)……亜細亜は其の本来の高貴に復るべく、先づ二元的生活を脱却して妙法を現世に実現する無二無三の大乗亜細亜たることに努めねばならぬ。之が為には、吾等の社会的生活、その最も具体的なるものとして吾等の国家的生活に、吾等の精神的理想に相應する制度と組織とを与へねばならぬ。予は是くの如く考へた。是くの如く考へたる故に、予は最も広汎なる意味に於ける政治の研究に深甚なる興味を抱いた。……(中略)……亜細亜の指導、その統一は、實に大義を四海に布く唯一路である。そは日本の為であり、亜細亜の為であり、而して全人の為である。総ての亜細亜をして、来りて日本を強め、而して復興亜細亜の実現の為に協力せしめよ。これ實に予が

27) 同前書, pp. v~viii.

28) 同前書, p. 45.

29) 同前書, p. 57.



日々夜々の祈である。唯だ痛恨極まりなきは、今日の日本が尚未だ大乘日本たるに至らず、百鬼横行の魔界たることである。日本の現状、今日の如くなる限り、到底亜細亞救済の重圧に堪えず、亜細亞諸国また決して日本に信頼せぬであらう<sup>30)</sup>。

大川は、アジアを復興し世界を改造・統一するために日本国家の改造を急務とし<sup>31)</sup>、亡命印度人志士を支援すると共に、1916(大正5)年に最初の著書『印度に於ける国民運動及び其の由来』を出し、日本がアジアを救うべき重責を負っている旨を説いたのである<sup>32)</sup>。なお、同書は、コットン著が、ヴィクトリア「女皇の公約が無視せられて、印度人が当然適任なる官吏の地位に就くことを許されざるを批難し、高級官吏が英人の独占する所となれる結果、司法官の如きも英人に対しては過輕の刑罰を、印度人に対しては過重の刑罰を課する事実のあること、英人が英国の陪審官によって審問せらるる場合の如き、時としては殆ど司法権の神聖を犯すに等しき結果に陥ることを指摘して居る」とも述べている<sup>33)</sup>。

こうして、大川は、薄伽梵歌より得た教訓を国民にもあてはめるようになり、「初めて全我の満足を得る」と共に、「げに仮令劣機にても自己の本然を尽すは、巧に他の本然に倣ふに優る。如何に況んや日本の本然が、暫に劣機に非ざるのみならず実に森厳雄渾なるを知りたる以上、予は勇躍して予の全心身を日本其者の為に献げねばならぬ<sup>34)</sup>」という意識を抱くに至った。

なお、彼は、大学卒業後、松村介石の勧めにより列聖伝を編纂することになり、日本史を二年余り研究した結果、真個に日本人として眼覚めるに至ったが、その目を「漸く外にも向け初め、政治的現象に深甚なる関心を覚へるやうになって」<sup>35)</sup>、アジア復興と不可離の日本国家改造に強烈な使命感を抱いたのである。

30) 全(2)4～7頁「復興亜細亞の諸問題」の「序」。

31) 全(2)7頁「復興亜細亞の諸問題」の「序」、全(4)439頁「世界戦(第一次)と日本」(大正10年)、全(4)487～88「国民的理想の確立」(昭和2年)。

32) 参照、全(2)531～632頁、全(1)6頁「大川周明略伝」。

33) 全(2)580頁。

34) 全(1)113頁「日本精神研究」。

35) 同前。なお、列聖伝云々の記述は、安岡正篤『日本精神の研究』(大正13年、玄黄社)所載の大川の跋文「日本精神への復帰」による。

## 日本精神

彼は、日本精神の復興を国家改造案の根本として提唱していった。まず日本精神の本質を堅確に把持することに努め、「日本精神の長養」と「日本国家の成満」を期したのである<sup>36)</sup>。

大川の説く日本精神は、「国家主義，理想主義，健闘主義，精神主義を生命として」おり<sup>37)</sup>，至高の日本精神は「清高明朗なる精神」であり，「最も凱切に富士山によって象徴せられる」という<sup>38)</sup>。そして，横井小楠と同じく，彼の云う本来の日本精神は，偏狭な島国根性ではなく<sup>39)</sup>，「総ての外来思想や文化を抱擁して，それぞれ適切なる位置を与へ，之によって国民生活の内容を豊富ならしめ且向上登高せしめる」ものであった<sup>40)</sup>。従って，この日本精神は，「日本的なるものを唯一無上の真理として，之を異邦的なものと対立させ，之を他国又は世界全体に強制しよう」としない意味で日本主義ではなかったのである<sup>41)</sup>。なお，彼は，自著『日本及び日本人の道』（1926年刊）を日本精神的でないとして蓑田胸喜に批判攻撃されたり，また自身が「非主義者」であった旨を晩年に記している<sup>42)</sup>。

彼は，天皇を万世一系で「国祖の現身」と認識し，天皇に対する国民の「忠」の本質を父母に対する「孝」と同一と見ており<sup>43)</sup>，これは北一輝がその処女作『国体論と純正社会主義』（1906年刊）で打破しようと努めた「所謂国体論」に近い立場をとっている<sup>44)</sup>といえよう。大川は，日本国家の成立に関し実力説（暴力説）を適用することを否定し，氏族の長であったものが共同体の発達に伴い天皇になったけれども君臣関係は外国と違い人為を以て結ばれたのではなく

36) 全（1）114頁「日本精神研究」。

37) 全（4）475頁「国民的理想の確立」。

38) 全（1）119頁「日本精神研究」。

39) 同前。

40) 全（4）654頁「天照開闢の道」（昭和30年）。

41) 全（4）640頁「天照開闢の道」。

42) 全（4）581～9，642～4頁。

43) 全（1）863頁「安楽の門」。

44) 参照，宮本盛太郎「北一輝」『近代日本の思想（3）』1978年，有斐閣，22～3頁。

「神ながらの宿縁」とし<sup>45)</sup>、天皇を「国民の生命の本源」で<sup>46)</sup>、「総ての生命を統一する最高の生命」とみなしたのである<sup>47)</sup>。従って、彼は、天皇に関する明治憲法並びに法律の規定内容に不満であった<sup>48)</sup>。彼は、この憲法・法律は「日本本来の風俗習慣乃至古来の法制などを十分に斟酌する暇なしに出来たのであり、……条約改正の時を以て其の役目は終った」から「今後国民が真個に日本的に覚醒し、日本の精神の如実の実現たる国家を組織する時が来たならば……本質的に改訂せられるべき筈のもの」と主張した<sup>49)</sup>。なお、彼は、天皇が宇内すなわち世界を統一すべきものである、とも述べている<sup>50)</sup>。

大川は、その「源を英米の個人主義、功利主義、快楽主義、唯物主義に発する」<sup>51)</sup>デモクラシー思潮が、すべての平凡化を目指して低きものを高めた点に歴史的意義と価値を認めたけれども<sup>52)</sup>、人類の魂から荘厳な理想を、また国民から壮心烈志を奪い、崇高なるべき人生を俗悪化するから<sup>53)</sup>、日本精神と決して相容れない思想と考えた。そして、彼は、デモクラシー思想の発展が、「群集の要求に左右せらるる国家、大多数民衆の安逸無事を求むる心に支配せらるる国家、従って理想の為に善戦し、志業の要求の為に健闘する精神を失へる国家の出現」を帰結する、と説いた<sup>54)</sup>。

彼にとって、このような民主主義は、「虚偽の民主々義、虚偽の平等主義」である反面<sup>55)</sup>、「真個の民主主義」は、「政体の如何を問はず、国民を重んじ、其の要求、其の向上、其の精神を重んずる」ところに存在し、「国民精神の至深の思慕、其の至秘至奥なる憧憬」を尊重する思想、と言えたのである<sup>56)</sup>。

---

45) 全(4) 468頁「維新日本の建設」(昭和2年)。

46) 同前。

47) 全(1) 50頁「日本及日本人の道」(大正15年)。

48) 同前。

49) 全(1) 51頁「日本及日本人の道」。

50) 全(4) 487～8頁「国民的理想の確立」。

51) 全(4) 475頁「国民的理想の確立」。

52) 全(4) 179頁「押川方義先生を憶ふ」。

53) 同前。全(4) 487～8頁「国民的理想の確立」。

54) 全(4) 475頁「国民的理想の確立」。

55) 全(4) 487～8頁「国民的理想の確立」。

56) 全(1) 284頁「日本精神研究」。

宗教・学問・政治

ところで、大川は、頭山満（右翼の巨頭）、押川方義（宗教家、晩年に代議士）、及び八代六郎（海軍大将）の三人に傾倒し、宗教学上の影響を受けていったが、次のように回想している。

私は頭山翁に於て真個の日本人を、押川先生に於て真個の信神者を、八代大将に於て真個の武人を見た。私は三先生に親炙して、三者著しく面目を異にするに拘らず、等しく抱一無離の宗教人であることを知った。抱一無離は即ち至誠である。至誠とは其内に流れる普遍の生命が一貫不断なることである。私は三先生によって至誠即ち一気の流に乗託することが真個の人間となる道であることを、希有な例証によって学ぶことが出来た。……（中略）……私は、自分の最も尊敬する三人の先輩の信仰が、如何なる既成宗教にも拘泥せず、唯だ一心天に通ずるを旨として居ることを目の当りに見、また日本の代表的偉人の信仰も同然であったことを知った。此事は図書館や大学で学んだことよりも一層大切なことを私に教へた<sup>57)</sup>。

また、その生涯を通して彼に安心を与えてくれたのは、母親の慈心と西郷隆盛の至誠の魂であったが、1920（大正9）年当時、次の如く述べている。「吾等の安心とは、自己の中に無限性を認め、その開発の疑なきに安んずる事である。されば神に至る唯一の道は、自己に忠実に活くる事に外ならぬ。」<sup>58)</sup>。

西郷隆盛は、その維新当時の庄内藩（奥羽越列藩同盟加盟）に対する言行から特に庄内の人々に慕われた人物であり、大川に「人生に関する思索の基礎たるべきものを与へてくれたのも、大西郷の『道は天地自然の道なるゆゑ講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。』といふ『南州翁遺訓』の中の一節である」という。なお、彼は、頭山や八代の場合のように、既成宗教の信仰に入らなくとも、「人性の宗教的一面を長養することが出来る」と結論するようになる<sup>59)</sup>。

ところで、大川は、稀な例外を除けば、「信仰が学問の母」であると考えた<sup>60)</sup>。そして、横井小楠のいう「真個の学」にならって、「学問は一心の成満

57) 全（1）816頁「安楽の門」。

58) 全（3）185頁「完教原理講話」（大正9年）。

59) 全（1）823頁「安楽の門」。南州翁遺訓の引用の個所も同頁による。

で「聖賢となるの修行である」が、その第一義は、「吾等の心裡に在る至上法を把握」し「之を生活に実現するに在る」<sup>61)</sup>と考えていたとみられる。

また、彼にとって、政治は、「宗教が提示する人間の本体を発揮し、道德が教える人間の本務を完うするために、最も適切有効なる生活を創造して行くこと」で<sup>62)</sup>、「愛人即ち仁の客観化」でもあり<sup>63)</sup>、マキャベリズム的に「打算と権謀とを以て、権力を争奪し翫弄すること」でなかったのである<sup>64)</sup>。

## 第二維新

大川は、明治維新を「天皇と国民との間に介在せる大名小名の手から、土地と人民との支配権を奪ひ、官武一途、四民平等の国家を建設し、以て内は国体の真面目を発揮し、外は世界の形勢に順応せしむることを目的とせるもの」とみなしていた<sup>65)</sup>。けれども、彼は、1918(大正7)年の米騒動を主要契機として、明治維新の精神を徹底させるために、第二維新の必要を痛感し始めたのである<sup>66)</sup>。

彼は、皇室と国民との間に、黄金と権力の相結んだ「黄金大名」が第一次桂内閣(明治34～39年)当時から介在し、明治維新の理想を中道で挫折し始めたことみなしたが、1918(大正7)年の米騒動に関し次の如く述べる。「国家が軍を西比利亜に出だして戦はんとする其時に、国民は自己の衣食のため『騒動』を起したのである。霜を履んで堅氷至る。吾等は此の一事に於て日本の恐るべき欠陥をまざまざと見せ付けられた。』<sup>67)</sup>。

こうして、彼は、思想交換機関の老壮会に参加後、日本の現状では、アジア

---

60) 全(3)345頁「宗教学原理講話」の「序」。

61) 全(1)126頁「日本精神研究」。

62) 全(3)180頁「印度思想概説」(昭和5年)。

63) 全(4)462頁「道義国家の原則」(「月刊日本」創刊号、大正14年4月)。

64) 全(3)180頁「印度思想概説」。

65) 全(4)469～70頁「維新日本の建設」。

66) 参照、全(4)474頁「維新日本の建設」、全(4)425頁「月刊日本」第70号、全(4)619頁。

67) 全(4)473～4頁「維新日本の建設」。

解放は不可能であるとして、1919(大正8)年、満川亀太郎、北一輝らと共に「猶存社」を結成した<sup>68)</sup>。この両者は、幸徳秋水らの「平民新聞」を創刊号から愛読し、大川同様に同紙による社会主義の思想的洗礼を受けており<sup>69)</sup>、その青少年時代を日清・日露両戦争から大正時代にかけて過す世代の思想遍歴の共通性を示している。以後、猶存社は、天皇と軍人を主体に国内改造を断行し最強固をめざす北著『国家改造案原理大綱』(後に『日本改造法案大綱』と改題)を公刊すると共に、軍人や学生の一部に共鳴者を得ていった<sup>70)</sup>。大川は、第二維新で日本が「真個世界の救拯者」になることを期したが、「維新にして同様に復古」である旨も強調したのである<sup>71)</sup>。なお、彼と北とは、1922年頃から、見解や性格の不一致、経済面での生活様式や宗教的境地の相異などにより疎遠になり、猶存社も1923年に解散する。けれども、大川は、以後もこの北著を佐藤信淵の国家論以降の最も模範とすべき日本の国家改造論とみなしたのであり、彼のめざす改革の範囲と程度は「ロシアの右、ドイツの左」となっていく<sup>72)</sup>。

大川は、第二維新を必要とする国状を生じた要因として、1921(大正10)年当時、次の如きものを挙示している。(一)日清・日露両戦争後における人心の弛緩。(二)政府当局者の無責任と無誠意、特にその自由放任政策により国民を圧迫したこと。(三)第一次大戦による貧富の差の拡大、及び物価昂騰による民心不安。(四)デモクラシー思潮と極端な保守主義との対立抗争による人心不安。(五)英米勢力によるアジア侵略の進展<sup>73)</sup>。

68) 全(1)7頁「大川周明略伝」。なお、金内「革命児・大川周明」前掲誌209～10頁には「猶存社の北一輝は、智者は北、勇者は大川、仁者は満川亀太郎として、その三位一体の妙用を称えた」とある。

69) 満川亀太郎『三国干渉以後』伝統と現代社、1977年、84頁、田中惣五郎『北一輝』未来社、1959年、28～30頁。

70) 拙著『昭和初期政治・外交史研究(普及版)』人間の科学社、1981年、137頁。

71) 全(4)475頁「維新日本の建設」。参照、富樫富「前掲書」93頁。

72) 全(1)152頁「日本精神研究」。改革の範囲等についての引用は全(4)628頁所収「月刊日本」(昭和7年5月1日)、参照、金内「革命児・大川周明」前掲誌209頁。

73) 全(4)427～30頁「第二維新に面せる日本」。参照、全(4)517頁「吾等の志業」(昭和4年)。

則天行地

ところで、彼は、1925年、皇居内旧本丸にあった「社会教育研究所」(1921年開設、学監・安岡正篤、主幹・小尾晴敏)を譲り受け改組して「大学寮」と改め、日本精神の鼓吹を中心に教育者の再訓練を始めた。大学寮には牧野伸顕(宮内大臣)、関屋貞三郎(宮内大臣)、荒木貞夫(参謀本部課長)、秦真次(東京警備司令部参謀長)、渡辺錠太郎(参謀本部部長)、また、西田税が寮監兼講師になってから陸海軍の革新派青年将校達も出入した<sup>74)</sup>。

大学寮は、同年中に、宮内省から建物取払いを要求されて廃止となったが、大川は、既に前年から、維新日本の建設、国民的理想の確立、有色民族の解放、世界の道義的統一、などをめざし「行地社」(但し発足当初は「行地会」と称す)を組織していた。行地社は、精神的・政治的・経済的生活における日本的理想の具体的な実現、すなわち国家改造をめざし、機関誌『月刊日本』を発行していった<sup>75)</sup>。

当時、彼らの言う「理想」及び「使命」とは、「日本の喪に渾然として存する生命の、統一的・総合的完成」で、「日本の志を実現すること」であり、「一切を超ずる神と一切に内在する神とを吾等の宗教的生活に実現すること、一切を抱擁する愛と寸毫も仮借せざる力とを吾等の倫理的生活に統一すること、最も義務的な服従と最も権利的なる君監とを吾等の政治的生活に調和すること」であった<sup>76)</sup>。

大川は、「則天行地歌」として次掲の如く作詞しているが、これは彼の国家改造思想を理解する上の参考になるであろう。なお、ゴシック体の部分は、後年、五・一五事件に参加する三上卓(海軍中尉)が作詞した『昭和維新の歌』でも同じく見出される歌詞であることを示す。

74) 拙著「前掲書」138～9頁、全(1)5頁「大川周明略伝」。

75) 拙著「前掲書」139頁、全(1)7頁「大川周明略伝」、全(4)614頁「行地小論」、今井清一・高橋正衛編『現代史資料4』みすず書房、昭和38年、26頁。参照、全(4)511頁。

76) 全(4)612～3頁「行地小論」(昭和3年8月)。

1 久遠の理想抱きつゝ  
 混濁の世にわれ立てば  
 義憤に燃えて血潮湧く  
 嗚呼吾胸に漲るは  
 天に則り 王道を  
 地に行はむ志

2 権門上に傲れども  
 国を憂ふる誠なし  
 大地震へど尚覚めず  
 白虹日をば貫けど  
 天を畏るゝ心なく  
 たゞ苟安をことゝせり

3 財閥富を誇れども  
 民を念ふの情なし  
 飢に迫れる同胞は  
 国を呪ひてひたすらに  
 乱を思へど顧みず  
 たゞ貪婪の爪を研ぐ

4 正義に結ぶ益良雄の  
 使命は重し混沌の  
 国と民とを救ふべく  
 隻刃の剣提げて  
 吾等起たずば天照らす  
 この日の本を如何せん 77)。

こうして、大川をはじめ行地社同志は、「論じては一世に警策し、秘しては要路に説き、無形無跡の地に機輪を転ずること」7年に及んでいく<sup>78)</sup>。この点、「月刊日本」における主張は既に本稿で史料として度々用いてきたので、ここでは要路に対する働きかけの例として、牧野伸顕(宮内大臣)宛の大川書簡中、改革思想や運動を記している個所を次に二、三掲げておく<sup>79)</sup>。大川は、牧野と大学寮当時から親密な接触を保ち「金銭的な面で協力を受け」、皇居内の建物も彼のお陰で使用しえたが<sup>80)</sup>、1926(大正15)年の牧野宮内相に収賄の事実ありとする怪文書事件(北海道御料林私下問題)の結果、西田ら北派は行地社を去ったのである<sup>81)</sup>。

【大正15年3月27日付】時に帝国議会は醜態極まる処なく、各個の政党皆な自ら葬むるの墓穴を掘るに忙がはし。……(中略)……。君国の今日は一言にして尽し去れば正に落心の秋なり。内には政道地を払ひ、外には四面ただ楚歌を聴く。老大人 君側に奉侍して君国の現前を見、その将来を念ひ給はば必ずや中夜の恨思曉に徹することあるべ

77) 全(4)455頁「道義国家の原則」(大正14年)。なお、『昭和維新の歌』の歌詞は、軍歌『あゝ陸軍』キングレコード、1968年、5頁による。

78) 全(4)611頁「行地小論」、全(1)7頁「大川周明略伝」。

79) いずれも国立国会図書館所蔵「牧野伸顕関係文書」中の書簡である。

80) 引用は富樫富「前掲書」136頁。参照、金内「革命児・大川周明」前掲誌、212頁。

81) 拙著「前掲書」140頁。



きか。蓋し断々乎として人心を一新するに非ざるよりは、祖宗の遺業竟に挫折するの非運に会せん。微力為すなしと雖、凛烈の勇を鼓皇天を拝し、気を鮮かにして大義に拮据せんとする所以なり。乾坤一擲、成敗を一挙に決するは、会心固より極まりなしと雖、一国のことは投機僥倖を許さざるが故に、嚴に奔逸の気を利して愆ろに思慮し、先づ適切な個処を洞察して着々革新の礎を堅め、万全無謬の歩を進めざるべからず。曩日老大人の意を得たる協調会の如き若し有為の人其局に当らば、必ずや君国に貢献する大なるものある可し。……（中略）……。事に急なるは道に緩に、道に濃かなる者は事に緩なり。生等同人自ら揣らず、道と事とを兼ね備へて君国の重任を負はんとす。故に困厄し憂悶することも亦道学者と政党者との比に非ず。希くは老大人 深く生等の志を憫み、誘掖示教の労を吝み給ふ勿れ。就中生の如きは殆ど絶えて権貴門を潜らざるが故に、微耽訴ふるに其人なく、たゞ老大人の在るありて僅に一縷の光明を仰ぐのみ。

【大正15年8月3日付】生鹿兒島宮崎両県ノ県教育会ニ招カレ「明德新民ノ原理」ヲ説カンガ為ニ今タラ以テ西下ノ途ニ就カントス<sup>82)</sup>。

【昭和2年4月晦付】殊に内外昨今の国状転た心胆を忡々たらしむるもの多く聊か奉公の覚悟も定まり申候につき近日是非拝趨高教を仰ぎ度……。

【昭和2年8月14日付】生事岩手県の僻僻停車場を距る16里の海浜にて漁村の青年約200と四日間鍛鍊致し明日より更に山形県の山中大高根に於ての50の農村青年と三日間寝食を共にすべく当地に來り申候、如是の事今日の日本に對し恰も一盞のインキを投じて東京灣を紅ならしめむとするに等しく所詮は無効の努力と存じ候へ共他に奉公の途を与へられざる生にとりて是亦拱手坐視するに優ると自ら慰め申候。

ところで、1920年代に、大川は、「今の世は明治維新のからくりが依然として運転して居り」、表面は動きの取れぬ世の中であるけれども、元老、官僚、政党をはじめ「一切の旧き権力」の拠って立つところが空虚な因襲にすぎぬことを天下の具眼者により見透された時に、社会的混乱が生じ実力者の勝利となる、と主張していた<sup>83)</sup>。そして、行地運動を指導する彼にとって、実現不可能な思想は思想ではなく空想であり、「正しき思想」は必ず実現されねばならなかった。彼は、『力』とは思想の実現、「理想の発動」であり、「正しき思

82) 参照、全(4) 457～8頁「道義國家の原則」。大川は、『大学』首章の如く「明德と新民とは必ず相伴ひて行はれねばならぬ」と述べている。

83) 全(1) 247～8頁「日本精神研究」。

想」を断行すれば「茲に初めて吾等の力が現はれる」と説いたが、この点、政治家や学者を含む日本の有識階級は、理想と使命を自覚しないから、常に国力や国富を先にし国家の施設や国策を後にする、とみなしたのである<sup>84)</sup>。

彼は、第一次大戦の社会主義を代表とする国家改造思想が「一切を外面的の改革にのみ求め国民の精神的反省を蔑視又は無視する」<sup>85)</sup>点を批判し、次のように述べる。「個人と言はずまた国家と言はず、其の最後の根柢は竟に抛りて立つところの精神に在る。一切の外面的制度は、所詮精神の具体的発現に外ならぬが故に、日本国家を改造すると云ふことは、取りも直さず吾等の精神を改造することである。而して精神を改造すると云ふことは、真個の日本精神に復帰すること」である<sup>86)</sup>。彼は、進展する左翼運動に対し、日本的改造の原理を主張し、外国を模倣しない「日本精神の真個の体现者」による国民的運動を提唱したのである<sup>87)</sup>。

彼は、「真個の政績」を挙げるために、鍛錬工夫を續んだ政治家が衆生の導師を以て任じなければならないのに、現実の「所謂一流の政治家」<sup>88)</sup>、「内閣や大臣」<sup>89)</sup>は、「無技量」でしかもそれに自ら気付かずにいるから、国政を拙し得ない、と慨嘆した<sup>90)</sup>。彼が、日本の政治家に最も飽き足らないのは、その「心術」であった<sup>91)</sup>。

彼の国家改造思想は、「二度と繰返し難き生を此国に享け、また此時に際会した」という「一大事因縁」により「生活の一切を挙げて、日本の生命に参与して居る」から「此国の榮譽を負ふて立たねばならぬ」という考えに立脚しており、この「因縁」を「精神化又は道義化すること」により「真個の生活」の実現を期していった<sup>92)</sup>。彼は、西郷隆盛が国家の生命は「正道を踐み、義を尽

84) 全(4) 476~7頁「国民的理想の確立」(昭和2年)。

85) 全(4) 459頁「道義国家の原則」。

86) 全(1) 119頁「日本精神研究」。

87) 全(1) 390~1頁「日本的言行」(昭和5年)。

88) 全(4) 610頁「行地小論」。

89) 全(1) 268頁「日本精神研究」。

90) 全(4) 610~1頁「行地小論」。

91) 全(1) 57頁「日本及日本人の道」(大正15年)。

92) 全(1) 95頁「自由・平等・友愛の理想」(昭和2年)。

す」に在りと信じたと見<sup>93)</sup>、この精神に則り国家改造を進めようとした<sup>94)</sup>。

彼は、歴史の進行を人格発展の経路と認識し、「最初に新しき社会理想を抱く者は、必然万民の敵」であるけれども、同志と共に「永く民衆と戦ふ」ことにより「新しき社会」を生じるから<sup>95)</sup>、「新しき国家は、先ず偉大なる個人の魂に生れ」、「人類の向上登高、社会の改造革新は、唯だ偉大なる人格によってのみ促進されて来た」と考えたのである<sup>96)</sup>。

### 道義国家

ところで、大川の五高当時からの文章を読めば、彼は「国家」と「社会」とを厳密に区別しないで用いているようである。例えば、彼は、新たな「国家」に関し、「吾等の道徳的生活が、内面的に或る段階に達すれば、必ず之に相応する一定の社会組織が、客観的に実現せられずば止まぬ。……(中略)……。社会は組織せられたる善、又は客観化せられたる道徳である」と述べているのである<sup>97)</sup>。この点、北もその著『国体論及び純正社会主義』で両語の区別をしておらず、これは国家感情等に基づき故意にしたというが<sup>98)</sup>、大川の場合は、おそらくその道義的国家観によるものと考えられ、またプラトンらの単元的国家観の影響もあるかもしれない。

彼は、法学的、社会学的国家研究を国家の一面しか考察しないと批判して<sup>99)</sup>、プラトンやアリストテレス、及び儒教の国家観に類似する形而上学的、道義的な国家観を抱持したが、理想国家に関し次のように述べている。「奈良朝時代、日本が初めて明確に国民的自覚を抱ける時、印度思想の精髓を体得せる吾等の祖先は、国家を以て妙法の実現と観じ、仏土の莊嚴を日本に期待した。吾等一

---

93) 全(4)506頁「我等の本領」(昭和4年)。

94) 全(4)507頁「我等の本領」。

95) 全(4)457頁「道義国家の原則」, 全(4)465頁「維新日本の建設」。

96) 全(4)180頁「押川方義先生を憶ふ」。

97) 全(4)457～8頁「道義国家の原則」。

98) 参照、宮本盛太郎『北一輝研究』昭和50年、有斐閣、67頁。

99) 全(4)460頁「道義国家の原則」。

面国家を以て利己満足の機関なりとするアングロ・サキソン思想を克服し、他面国家を以て支配階級掠奪の機関なりとする社会主義思想を止揚して、新たに建設し組織せんとする所のものは、實に是くの如き国家に外ならぬ。」<sup>100)</sup>

彼は、日本国家の営みを「絶類超群」であると考え、「皇室と国民と国土と、この三者は心血相通う一体にして其一を欠けば最早日本国家の生命がない」と結論したのである<sup>101)</sup>。

彼は西郷隆盛を含む明治維新の先覚者達が、日本を道義国家にするために命をかけて尽力したとみなした<sup>102)</sup>。そして、日本国家を混沌状態から脱却させる方策として、「文教の方面と、狭義に於ける政治の方面と、経済的方面との三つを分化せしめて、夫れぞれの方面に一貫した系統を樹て、それを国家が統一して行くこと」を提唱している<sup>103)</sup>。すなわち、文教面は「国家をして国家たらしめ、国民をして国民たらしむる根本生命を明らかにし、之を生活の上に実現せしむることを主眼」とし、政治面は「国民個々の人格を確立せしむることを以て究竟の任務」とし、経済面は「全民に最も貢献するように統制」すれば、道義国家が出現する、というのである<sup>104)</sup>。

彼は、「国家は理想のために存在し、国民は国家の理想に献身することによって、人間としての意義及び価値が確立せらるることを体得せねばならぬ。吾等の国家は、久遠の理想に生くる日本精神の創造であり、同時に此の精神を保持し発展する絶対の組織体である」と全体主義的な道義国家観念を主張して、既述のように、「物質的・功利的国家観念」を排撃した<sup>105)</sup>。彼は、国家を「国民的生命の発現」と見、この生命すなわち国民精神が国家存立の原動力、と考えたのである<sup>106)</sup>。

100) 全(4) 339～40頁「世界戦(第一次)と日本」(大正10年)。

101) 全(4) 483頁「国民的理想の確立」(昭和2年)。

102) 全(1) 59頁『日本及日本人の道』(大正15年)。

103) 同前書、65頁。

104) 全(4) 462～3頁「道義国家の原則」。なお、経済面の統制に関しては、全(1) 102～3頁「自由・平等・友愛の理想」(昭和2年)、全(4)「我等の本領」(昭和4年)を参照した。

105) 全(4) 478頁「国民的理想の確立」。

106) 同前。

## 満蒙問題

ところで、大川は、1924(大正13)年頃、「僕は月給取をやめたら、革命はやらぬ」と言ったというのが<sup>107)</sup>、彼にとって、南満州鉄道株式会社東亜経済調査局の運営は、生涯を通じての最大の事業であった<sup>108)</sup>。彼は、植民政策の研究を認められて、1918(大正7)年、同社に入社し、翌年、同局課長となり、以後も果進し、1928(昭和3)年、同局局長に就任したが、この間、同局の仕事として物した論文「特許植民会社制度の研究」を北一輝に勧められ1926年に東京帝国大学に提出し、法学博士の学位を受けている。東亜経済調査局は、1929年6月、大川の尽力で財団法人となり、調査研究の自主性を得ると共に、調査目標を満州から全アジアへ拡大した。そして、彼は、理事長として一切を統轄していった<sup>109)</sup>。

当時の頃までの大川の報酬月額は、次表の如くであるが、例えば、1920(大正9)年当時、国会議員の諸手当を含まない報酬月額三千円に近い高給であったから、自費で人を使うこともできたのである。なお、兼任で拓殖大学教授をも勤め、1920年から1928(昭和3)年まで、植民史、植民政策、東洋事情の講座を担当した<sup>110)</sup>。

	職 名	報 酬 月 額
1919(大正8)年	東亜経済調査局編輯課長	171 円
1920(大正9)年		240 円
1921(大正10)年		260 円

107) 金内「革命児・大川周明」前掲誌、212頁。参照、富樫「前掲書」136頁。なお、金内によれば、当時、大川は月給袋をそのまま大行社の清水行之助に渡していたという。

108) 竹内好「大川周明のアジア研究」『大川周明集』394頁。

109) 拙著「前掲書」137, 141頁、全(1)4～6頁「大川周明略伝」。金内「革命児・大川周明」前掲誌、210頁。

110) 参照、表は、富樫「前掲書」136～7頁及び今井清一・高橋正衛編『現代史資料(4)』27頁、により作成した。参照、『続々・値段の明治・大正・昭和風俗史』昭和57年、朝日新聞社、19頁。拓大関係は、橋川編「前掲書」446頁の「年譜」によるが、狩野敏「大川周明と共に」『第三文明』(昭和50年2月号)60頁によれば、大川が満川亀太郎や安岡正篤を推薦して拓大の同僚にしたという。

1922 (大正11) 年		280 円
1923 (大正12) 年	東亜経済調査局調査課長	(調査費も出る)
1926 (大正15) 年		330 円
1928 (昭和3) 年	東亜経済調査局参事	360 円
1929 (昭和4) 年	(財団法人)東亜経済調査局理事長	750 円(他に賞与6ヵ月)

ところで、大川は、第一次大戦以後、国内改造とアジア復興とを不可離の課題にしてきたが、やがて大陸問題を緊急に解決すべき重要課題とするようになった。この点、彼は、1927 (昭和2) 年初めに、「些々たる内閣の更迭のために不快聞くに堪へざる運動を敢てして、隣邦の大事、吾眉を焦がすを知らざる当今の政治家の心事」を江戸開城談判の西郷・勝間における場合に比して、「相距ること抑々何万里ぞ」と慨嘆している<sup>111)</sup>。

彼は、大正末から昭和初期にかけて、社用を含めると毎年の如く渡満し<sup>112)</sup>、1929 (昭和4) 年当時、「在支在満の盟友と共に、復興亜細亜の礎たるべき若干の石を置くことによって」同志の志業を一步進め得た、と確信した<sup>113)</sup>。

彼は、「満蒙を支那本部と離れた特殊の政治区域にせねばならぬと考へ、一言一行皆な此の主義に則る」ように努めたが<sup>114)</sup>、1928年9月の張学良との会談では「日本と東三省との間に横たはる精神的国境を撤廃させること」を説くと共に「儒教の政治的理想に就て語り合った」という<sup>115)</sup>。

その後、大川は、1931 (昭和6) 年の満州事変の勃発直前に、次の如く満蒙の状況を認識したのである。

今日の吾国の当局者は、明治以来の莊嚴なる東洋政策の精神を忘却し去れるが故に、満蒙に於ける日本民族の位置を、積極的に進展せしめんとする道徳的乃至政治的努力を払ふことがない。それ故に日支両国民族は満蒙の野に於て唯だ自然律に支配せらるゝ生

111) 全(4) 607頁「行地小論」。

112) その具体例を、大川の牧野伸顕書簡その他から列挙すれば、社用による1926 (大正15) 年3月9日から(下旬頃まで)、社用による1927年2月上旬から4旬の間、1928年9月から1ヵ月間(張学良と会談)、1929年前半の3ヵ月間(東亜経済調査局の法人化を山本満鉄総裁に説く)、などである。

113) 全(4) 508頁「吾等の志業」(昭和4年)。

114) 全(4) 591頁「張学良氏を訪るの記」(昭和3年11月)。

115) 全(4) 597頁「張学良氏を訪ふの記」。

存競争を試みさせられて居る。而も其の自然律に支配せらるゝ生存競争に於て、明かに日本民族は敗退し初めた。若し現状のまゝに推移するとすれば、在満同胞が沢庵桶を担ひて大連埠頭より引上げねばならなくなる日も、恐らく遠い将来の事ではないであらう。それは支那官憲は有らゆる方法を以て満州より日本を逐はんと努力するに拘らず、日本は之に対して何等の具体策をも講ぜざるが故である<sup>116)</sup>。

当時、大川は、満鉄と大連の存立が不可能になる危機を察知し、この原因として、中国側の条約違反、及び金建の満鉄運賃に比し銀価安による中国側運賃の割安なこと、などを指摘するが、中国ナショナリズムの正当性を認めなかった<sup>117)</sup>。

彼は、国民党政府による政治のやり方では、理想を自己の魂に求めず中国本来の思想や文明とも相反し、中国の太平統一を望みえないが、同政府後に本来の精神を備えた真の中国が誕生する、と儒教的倫理を基準にして中国を見たのである<sup>118)</sup>。

彼は、中国側の排日的な精神、政治的な悪意を特に非難し、中国側が誠意を欠く状態では、満蒙問題の交渉による平和的解決の見込みはない、と考えるに至った。そして、彼は、満蒙問題で我が国が最後の一线まで退讓した責任を、外務当局と有識階層に負わせると共に、「満蒙一たび乱るれば極東忽ちにして混沌乱離の巷とな」り、日本は台湾、朝鮮を失い亡国の路を歩むことになるから、満蒙の地域を確保する使命と責任をもつ、と結論した<sup>119)</sup>。同時に、彼は、「空想的なる国際協調主義、感傷的な人道主義、而して無理想なる政治上の自然主義、かくの如き思想が国民の魂を支配し初めてより、国民は敢然たる事実を直視し、その事実に対応して敢断なる行動を執る氣力を失った」とみなしたのである<sup>120)</sup>。

なお、彼は、満州国出現後の五・一五事件当時ではあるが、「月刊日本」(昭

---

116) 全(2) 654頁「満蒙問題の考察」(昭和6年6月)。

117) 全(2) 677, 679頁「満蒙問題の考察」。

118) 全(3) 108～9頁「漢民族と其文明」、全(4) 610頁「行地小論」。参照、橋川編「前掲書」431頁「解説」。

119) 全(2) 679～682頁「満蒙問題の考察」、引用文は679～80頁。

120) 全(2) 683頁「満蒙問題の考察」。

和7年5月)で、満州国と軍事・経済両同盟を結び有機的に一体となり満蒙を日本の生活に組織化し、植民地的な対満政策をとる財閥・政党と闘って経済機構を改造し、日本の満蒙進出を阻止せんとする英米ソ列強と外交上戦うべきこと、などを説いている<sup>121)</sup>。この点、大川は、既に1920年代中頃(大正末)から、アジアと西欧のそれぞれの最強国である日米両国が必らずや決戦の日を迎えるだろうと予測し、1930年のロンドン海軍軍縮条約との関連でも米国のアジア進出を警告し、国際連盟をアングロ・サクソンのための現状維持機関と見たのである<sup>122)</sup>。

### 軍部・軍人

ところで、満州事変前の時点においてではあるが、大川は、政治家一般が明治維新以後に「人格の修養を放棄して仕舞った」のに対し、軍人が精神的鍛錬を依然として重んじてきた堅実さを高く評価し、言語道断の政界と世界に誇るべき軍部との相異の根本的原因を、日本精神の把持如何に帰した<sup>123)</sup>。我々は、本稿におけるこれまでの考察により、大川の政治思想面の傾向として、精神的側面を偏重する点を指摘しうるのであるが、彼の軍人観についても同様でありえよう。既述の如く、彼の国家観は組織や制度よりも国民の魂を重視する道義国家を理想としており、少年時代から親交を保った論客・山口白雲の「百世稀有の大詩人」という大川評にも<sup>124)</sup>、その政治思想的特質の一面が表現されているように思われる。こうして、彼の軍人・軍部観は、例えば、軍隊が戦争で勝つことを目的とする組織であり、この特質として、中央集権的な指揮権や階層性、規律や団体精神を強固に有し、本来、政党など他の組織とは異なる、な

121) 全(4) 629～31頁「二重の難局に対する覚悟」。

122) 全(2) 843, 872～3頁「亜細亜・欧羅巴・日本」(大正14年), 全(4) 617頁「行地小論」, 全(2) 647～8頁「ロンドン会議の意義」(昭和5年5月), 全(3) 867～8頁「大東亜秩序建設」(昭和18年6月)。なお、同じ頃に石原莞爾も最終戦(対米戦)論を形成している。参照、秦郁彦『軍ファシズム運動史』原書房, 昭和55年, 221頁, 同『昭和史の軍人たち』文藝春秋, 昭和57年, 235頁など。

123) 全(1) 270～2頁「日本精神研究」, 全(1) 338頁「日本的言行」(昭和5年)。

124) 富樫「前掲書」9頁。



どの認識を十分に有していなかったようである<sup>125)</sup>。

ところで、大川は、既述の如く、学生当時の1908(明治41)年から、参謀本部第二部欧米課で戦史戦術のドイツ語文献翻訳アルバイトをした関係上、当時参謀本部課員の宇垣一成中佐、荒木貞夫少佐、渡辺錠太郎少佐、建川美次大尉、陸軍省課員の真崎甚三郎少佐らと接触または交際し始め、以後も陸軍との関係を深め、板垣征四郎、岡村寧次、小磯国昭、河本大作、佐々木到一、重藤千秋、多田駿、土肥原賢二らと親交を保っていた<sup>126)</sup>。彼らは、いずれも陸軍大学校出身の幕僚であり、この点、北一輝が、西田税を通じ、革新派青年将校達に影響力を有したのと対照的である。

陸軍当局は、1926年の宮内省怪文書事件で北らが検挙されて以後、北に対すると類似の警戒心を解いて大川へ公然と接近し始めた<sup>127)</sup>。そして、大川は、以後、例えば、1927(昭和2)年春に参謀本部及び教育総監部に招かれ、「天皇の本義」、「建国の精神」、「君国の理想」などをテーマに、二度にわたり4時間、同年冬に陸軍士官学校で中国人学生に対し「国史概論」を四回にわたり合計8時間講演しており<sup>128)</sup>、更に、1929、30年頃、度々陸軍大学校で課外講演を行い、最も弱い者に圧迫の加わる好例が官吏減俸問題である旨、演説したという<sup>129)</sup>。当時、彼は、第三師団参謀から陸士の中華民国学生隊長に転じた金子定一中佐と「盟友」と称しあう関係にあり<sup>130)</sup>、また参謀本部幕僚・長勇大尉とも「相識りて直ちに断金の交を結び、三月事件、満州事変、十月事件に際して

---

125) S. E. Finer, "The Man on Horseback" 1976, Penguin Books, p. 6.

126) 参照、拙著「前掲書」137～8頁。なお、大川の翻訳アルバイトは、鈴木正節「大川周明ノート」『第三文明』(昭和49年10月号)25頁によると「参謀本部の囑託であり中央アジアに詳しい長瀬鳳輔(黒龍会系)の紹介で」とあるというし、また、橋川編「前掲書」446頁「年譜」には、1920年に「初めて陸軍省新聞班を訪い、岡村寧次を知る」とある。

127) 拙著「前掲書」140頁。

128) 参照、大川の牧野伸顕宛昭和2年3月23日付書簡(橋川編「前掲書」371頁)。全(1)410～12頁。当時、大川は陸大の教官職をねらっていたという(金内「革命児・大川周明」前掲誌、211頁)。

129) 参照、拙著「前掲書」140頁。

130) 全(1)410～2頁「国史概論」。参照、全(4)593頁、今井・高橋編『現代史資料4』55頁。

は、死生を誓いて行動を共にし」ていった<sup>131)</sup>。彼は、長が「常に決死の覚悟を以て……一身を顧みない故に至誠」であるとし、その「至誠一貫の精神」を特に重んじたのであった<sup>132)</sup>。

こうして、大川のめざす第二維新の新たな「薩長」勢力として、軍人・軍隊は極めて重要な位置を占めていったのである<sup>133)</sup>。

---

131) 全(4) 641頁「長中将13回忌法要記」(昭和32年)。

132) 同前。なお、石原莞爾に関しては、参照、金内「革命児・大川周明」(前掲誌214頁)。

133) 参照、全(4) 519, 619頁。金内「革命児・大川周明」(前掲誌, 211頁)。金内によれば、大川の云う「薩長」とは「労働者と軍隊」であった。なお、海軍革新派の藤井斉の同志宛書簡(昭和5年1月22日付)中に「行地社の腹は陸軍々人にあり」とある(前掲『現代史資料4』52頁)。